「子供とつくる学び」の実現を目指して
～演劇的手法を用いた国語科『ごんぎつね』の実践～

馬場　廣之

はじめに

「子供とつくる学び」の実現に向けて、学校全体で今年度中取り組んできた。「子供とつくる学び」は、子供を前に授業を行ったからといって直ちに実現するものではないという前提に立って始まっている。つまり、「子供とつくる学び」を実現するためには、偶発的に実現するのを待つのではない以上、何らかの方略が必要になるということだ。本校では、この方略を「子供とつくる学び」の実現のための「手だて」と呼び、用いること、用いる時について参会者に対して明確にすることはもちろん、授業者がより自覚的になることを意図して、研究主題追求のための副題に位置づけ、焦点化して取り組んできた。今年度の研究の検証に当たっては、その「手だて」が「子供とつくる学び」の実現にどれぐらい寄与したのかを考察することが大切になる。本稿では、物語単元における「子供とつくる学び」の実現のために演劇的手法を用いた実践についてまとめ、その成果と課題について明らかにしたい。

物語単元における「子供とつくる学び」

なぜ、演劇的手法だったのか。それは学年当初に行った『白いぼうし』の授業までかさかのぼる。白いぼうしに入っているものがちょうから夏みかんに変わっていることを目にしたときの登場人物たけおの心情が、クラスの中でちょっとした話題になった。初め数人が意見を言い合う形である中、では試しに白いぼうしを持ち上げるところを劇化してみようと呼びかけ行ってみたところ、その劇化をもとにクラス全体が生き生きとし、ああだこうだと自分の意見を語り始めた。中には、自分の意見に納得してもらおうと自然と本文を引いて話し始める子供もいた。それは大きな変化だった。その時、物語単元における「子供とつくる学び」の実現を、**子供たち自身でさえ気づかないうちにページを繰って本文を読み込み、ああでもないこうでもないと話し合うことを通して、言葉と向き合い読みを深めていくこと**の中に見るようになった。以降『プラタナスの木』『一つの花』『ウナギのなぞを追って』と年間を通して劇化を用いた実践を行った。その中で子供たちが経験した演劇的手法の種類には、場面の簡単な劇化、地の文をセリフに書き換える一部分の脚本化、登場人物へのインタビュー、登場人物に聞こえない設定で読者視点から声をかける即興劇がある。

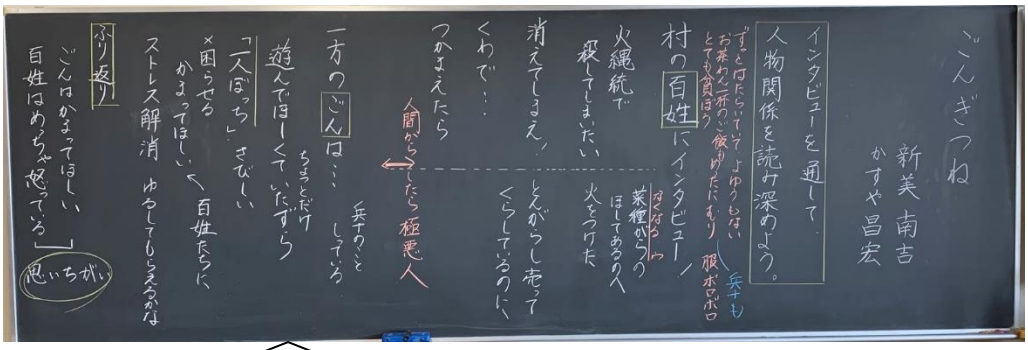
実践報告「『ごんぎつね』～演劇的手法によって楽しんで読みを深める～」

①演劇的手法を用いた場面とその種類（第 2, 3 次）

場面	種類
1（冒頭）	インタビュー（村の百姓：いたずらをされて）
1	劇化、インタビュー（指導案作成時より追加）
2	劇化（ごん：六地蔵の前とあなへ帰るところ）
3	劇化<フリーズフレーム>、インタビュー（ごん）
4	インタビュー（ごん）
5	劇化（ごん、兵十、加助）
6（前半）	ごんへ声をかける即興劇（ごん、読者）
6（後半）	劇化（ごん、兵十、加助）
6（後半）	劇化（ごん、兵十、加助）
結末以降	劇化（ごん、兵十、加助）

②子供の様子と、演劇的手法を用いた効果

以下、「インタビュー形式」、「劇化とインタビュー形式を併用」、「会議後の劇化」を用いた授業の中から、それぞれ 1 時間ずつ紹介する。



1 場面（冒頭）

村の百姓へインタビュー

・百姓なりきることで、ごんへの憎しみや怒りが、子供の言葉で生き生きと語られた。

演劇的手法の効果

・主観の様に話し根拠となる言葉が出されないときにはインタビュアーとして尋ねる形で引き出すことができる。（なぜそんなに怒っておられるのですか？）憎しみや、怒りの言葉を黒板上段に、その理由となる叙述は下段に板書して、本文の言葉を根拠に考えることを意識づけられた。

・百姓の立場からひどく言ったあとだから、ごんについてもいきいきと読み取ることができた。ごんと村人の間の溝の大きさ（設定）を掴めた。

・「ひとりぼっち」や、「ちょいといたずらがしたくなった」等の言葉に注目しながら、ごんについての設定をおさえられた。

3 場面

劇化<フリーズフレーム>（劇化中に静止する）

・位置を決めるために自然と読み取りが始まった。「少し離れて、そこそこ！」などと声が溢れる。

ごんへインタビュー

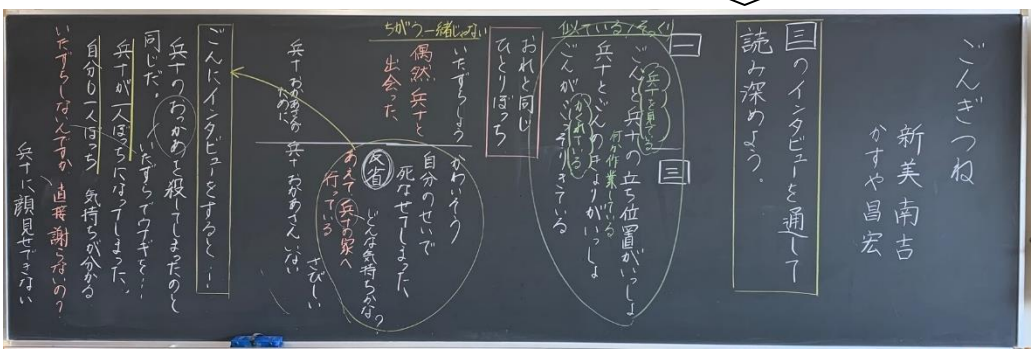
・ごんになりきってインタビューに答えられるようになりたくて、準備のために夢中で読んでいた。

演劇的手法の効果

・兵十とごんの位置関係について、2 つのグループが同時に演じて（静止して）いるので、一目瞭然に構図が同じであることがとらえられる。

・同じことをとらえた後だからこそ、2 つの場面の違いについて考えたくなり読み取りが始まる。

・インタビュアーを子供に任せることで思ってもいない質問が出され、緊迫感、臨場感の中、深まっていった。（「兵十に直接謝らないの？」「（本気の沈黙の後）顔見せできないんです…。」など）



6 場面（後半）【指導案本時】

劇化（会議、練習の時間もとる）

・距離や表情はどうしようかと、会議や練習の時に、本文に書きこみをしたものをもとに活発に話し合う姿が見られた。
・全てのグループが劇化を発表したい気持ちで、学習に盛り上がりが感じられる。

演劇的手法の効果

・劇化のポイントを確認してから、3 人グループに分かれて会議を行うことで本文の言葉に目を向けられる。
・グループに分かれて会議、練習を行うので、一人一人が意見を言いやすいし、話す時間が長く保証されるので、この時が一番深まりやすい。
・グループに分かれる前に、「位置関係、表情、心情」というポイントを確認しているので、劇化の後に全体で意見交流を行うときに話し合いの土台がそろいやすい。
・登場人物や監督という位置に立って劇化に取り組んだため、ふり返りが生き生きと書ける。
・「会議」「グループでの練習」「発表を見る時間」など、本文を読み返して言葉と向き合う姿、読み深めていくタイミングがたくさんある。

授業中に発表のあった子供の振り返り（3 人分）

C1：『一つの花』で最後にコスモスを見ていたゆみこの父と兵十は似ていて、ごんを見ることができずに、ごんへの気持ちを持っているからこそ、そのごんがくれたくりを見ていたと思う。

C2：この日は、兵十が加助に「明日見に来いよ」といった、「明日にあたる日」なので、加助が来るのだと思います。その時ごんのことを加助に話したのだと思います。そして、この話の最初の「茂平というおじいさんから聞いたお話です」という言葉にまでつながっていったのだと思います。

C3：私もまったく同じで、兵十が加助に話し、加助が誰かに話し、それが伝わっていき、やがて茂平につながっていったのだと思います。

指導案本時を終えて

この日も、会議や練習の時に、本文に書きこみをしたものをもとに活発に話し合う姿が見られたことがよかった。発表したうちの 1 グループ目には、どんな所を意識したのか聞くことができ、「「おや」という表現を大事に考え兵十の驚きを伝えようとくりとごんを何度も見比べる演技を行った」という意見発表を聞けた。それだけにあとのグループにもその場で聞けるとよかった。さらに、全体交流の冒頭で距離や表情を直接話題にしてしまったが、「ど

んな言葉を大切にしてどんなことが深まったか」と問えば、会議や劇化の時に読み深めた意見を交流することができ、子供たちの発言の中にも本文の言葉がたくさん出てきて、もっとダイナミックに展開することができたのではないかと感じる。

演劇的手法を用いる際の要諦

①会議（話し合いの生まれる仕組みを作っておく）

・演劇的手法を用いた活動に入る直前が最も大切

演劇的手法を用いた活動はあくまで「手立て」であって目的ではないけれど、子供にとってはインタビュー活動をすること、演じることが一番の楽しみ。そこで、演劇的手法を用いた活動に入る直前が大切になる。演じることに向けて本文をもとに話し合うとき、またはその話し合いに備えて本文の言葉と向き合うとき（本文への書きこみをするときやノートへ自分の考えを書くとき）が一番読みを深められるときになる。

・ポイントを明確にしておく

何について話し合うかがそろっていないと、演劇的手法による活動を見る観点がそろわなくなり、全体での交流が深まらなくなる。演劇的手法の良さのは空間を意識した身体表現にあったことから、今回は「位置関係、表情、心情」をグループで深めるために話し合うポイントとした。

②時間配分

・1時間のうちにメインとできる活動は1つ

演劇的手法を用いた活動を行うにはかなりの時間が必要になる。例えば、会議、劇化をして、さらにフリーズフレームをもとに意見交流をするということは、とてもではないが時間内に収まらない。インタビューをメインにするなら、その前にノートに書く活動を入れるなどして、しっかりと時間を使う。その分、フリーズフレームは即興で「ちょっとしてみて」という枠の中で扱う。

③深めるための発問

・焦点化のために工夫（発問など）が必要

動画の容量が大きいように、劇化も情報量が多いため、見る観点はグループや個人によってそれぞれで、全体での話し合いは拡散しやすい。最後深めるには何に焦点を当てるか決めておき、そのための発問を考えておく。視線や、寄り添うように立つ位置関係など、劇化の中で言葉にはできないが表現していることを取り上げるのがよい。ただし、発問するのは、十分に劇化や会議の中で深めたり表現したりしたことを交流した後がよい。

おわりに

演劇的手法を「手立て」とするのは、「子供とつくる学び」の実現はおろか、まとまり深まりのある学習として成立させることさえ実はなかなかに難しい。しかし、子供や教材と向き合う中で、（前項に要諦として挙げたように）工夫して難しさを乗り越える時、**演劇的手法は「子供とつくる学び」を実現する「手立て」になる**と明確に言える。それは、参加率の高さ、教科書を持って読みを交流する姿、場面と場面を比較するなど作品の構成を捉える力など、演劇的手法を用いたからこそ、**楽しみながら、自然に学びを深めている姿や身に付けた資質・能力が見てとれる**からだ。説明的文章『うなぎのなぞを追って』の実践について本稿では詳報しないが、その実践からは、物語教材に限らない演劇的手法を用いることの大きな可能性も感じられた。そこで今後は、要諦に挙げたような、「手立て」として用いる際の課題とその対処法をより詳細にまとめながら、演劇的手法を用いることで大きな効果が得られる教材についてもまとめたい。そうすることによって、演劇的手法について、「子供とつくる学び」の実現を目指す中で系統性をもった「手立て」としても提案していくことができると考えている。